

ミステリ読書案内

2022. 12. 28 発行元

第431号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

大沢在昌「黒石 新宿鮫Ⅻ」

11月に光文社から大沢在昌の『新宿鮫シリーズ』の第12巻に当たる『黒石ヘイシ』が出た。3年ぶりの新刊になる。『小説宝石』に連載したものを本にしたもの。久しぶりに「鮫」の活躍を堪能することができた。

3年ぶりの新刊

『新宿鮫シリーズ』は、私が常に新作を期待して待っているシリーズである。今回は帯も含めて黒のモノトーンのカバーでこれまでの本とはまた違った雰囲気。カバー絵に少女の像が描かれているが、これが大きな意味を持っていることは途中で読み進めればよくわかる。

題名の『黒石』には「ヘイシ」という読み仮名がついていて、一人の登場人物を示している。前作からの流れで、第二次世界大戦の中国残留孤児とその帰国二世、三世の人達にスポットが当てられていて、日本に戻ってきたものの社会からはみ出してしまう現状を取り上げている。「日本人でもないし、中国人でもない」という微妙な立ち位置がテーマになっている。

鮫島が謎の人物を追い詰める

鮫島が追い求めるのは地下ネットワーク「金石」の幹部とみられる「徐福」と呼ばれる人物。「徐福」が新しい動きを計画し、それに反対

する勢力の人達を排除し始めたようなのだ。同一の方法で殺害されたとみられる事件があって、過去にさかのぼって調査を開始した鮫島は、関係者を辿り始める。この鮫島の執拗な聞き込みがシリーズを通しての基本線であり、読者を引き込む大きな要素になっている。思っている以上に論理的で、考えの積み重ねが見事である。

捜査側は前作の流れを引き継いでいる。課長の阿坂、ペアを組む矢崎、鑑識の藪。シリーズ初期の鮫島一人の孤独な捜査から考えると、随分協力体制は取れるようになったなあと感じる。警察小説らしくはな

犯人側からの描写が効果的

ところどころに犯人側というか、名前のない人物の独白みたいな描写が挿まれている。最初の頃は短行なのだが、話が進むにつれて長い説明になり、事件や行動の背景を補う役目になっている。この部分が、本書の奥行きを作っている。

前半は少々流れを掴みにくい気

《大沢在昌・新宿鮫シリーズ》

1. 新宿鮫
2. 毒猿 新宿鮫Ⅱ
3. 屍蘭 新宿鮫Ⅲ
4. 無間人形 新宿鮫Ⅳ
5. 炎蛹 新宿鮫Ⅴ
6. 氷舞 新宿鮫Ⅵ
7. 灰夜 新宿鮫Ⅶ
8. 風化水脈 新宿鮫Ⅷ
9. 狼花 新宿鮫Ⅸ
10. 絆回廊 新宿鮫Ⅹ
11. 暗約領域 新宿鮫Ⅺ
12. 黒石 新宿鮫Ⅻ
13. 鮫島の貌(短編集)

最初は光文社・カッパノベルスだったが、途中からハードカバーの単行本に。中には毎日新聞に連載したものもあり、毎日新聞社から出た本もあった。今回は光文社刊。

がするけれども、半ばあたりに全貌が見通せるようになってくると一気にペースが上がる。後半は息を継がせぬ展開で最後まで行ってしまう。この盛り上げ方はさすが大沢の腕の見せ所といった状態。

一応の結末がついた形でまとまっているが、まだ話が続きそうにも思える。中国の現状は日本からは見えない点多すぎるので、その辺が続編になることも考えられる。東京に次なる脅威が迫ってくるのかどうか。たぶんまた3年後になるのだろうか。新作を待ちたい。

今野敏「秋麗 東京湾臨海署安積班」

11月に角川春樹事務所から出た本。気持ちを楽しんで読める。安心感というか、ある程度のレベルが保証されていて裏切られることもないし、どの登場人物にも馴染みがあって、物語の中での活躍が期待できるのだ。短時間集中で一気読みができる。

今回は、青海三丁目の海上で遺体が発見されるところから始まる。臨海署の安積剛志警部補たちは署の別館にある舟艇に乗って遺体を収容する。どうやら首の骨が折れての他殺らしいと推察された。捜査本部が設置され、本庁捜査一課との合同の動きになる。持ち物分析や現場付近の聞き込みは効果が上がらず、高齢者とみられる遺体の身許が判明しないので、最初の段階はほとんど動きが取れない。顔認証システムによって過去の事案に結び付き、被害者が特定されると捜査のテンポが上がる。そこからは、須田をはじめとするレギュラーが活躍し、特殊詐欺事件が洗い出され、他署の助力も得ながら犯人を追い詰めていく。防犯カメラやSNS上の分析は時代の流れに乗っている。『秋麗』という題の意味も含めて、後半に人の生き方を考えさせるテーマになっていく。安積も速水もまだ活躍中の年代なので、人生の先を考える時期ではないのだが…。